

私はこれまでに沢山の芸術に触れてきた。その中でも「書道」というものが私にとって一番素敵な道を教えてくれた。

小学校低学年の時、私は妹と共に書道教室に入った。最初は、「習字」として美しい文字を書けるように学び、他の誰よりも丁寧な文を書きたい一心で通っていた。その後私は中学生を機に辞めてしまったが、高校に入ってから書道部に入り再び書道に触れることができた。高校からは「書道」という形で小学生での「習字」で学んだ美しい文字を今度はその美しさを表現することを学んでいった。

「書道」という言葉は唐の時代からすでに使われており遣唐使を介して日本に伝えられてきた。また「道」は方法・技術という日用的な意味であるが、加えてそこには人間の技術を超越した何かが存在していると認識されていたのであり、それを「道」の語が存在している。また日本では、書にかぎらず和歌も「歌道」、その他「茶道」・「花道」・「剣道」というように様々な「道」が使われている。

私は「書道」を通して昔の古典に触れて、現代ではなかなか学べない古代人の知恵や文化、感性といったものを汲み取ることができると感じている。それは一本の道がありバトンを渡されているかのように思えた。今、古代人が書いてきた古典を現代の私達が書くことはこの先もまた違う誰かが書くことで道が続いていくと考えると、書道というものは文字を美しく書くだけでなく未来の子供達や書を書く人への道を作ることでもあるのだと思った。

加えて、現在私は顔真卿の「多宝塔碑」を臨書している。顔真卿は剛直な性格で馬鹿がつくほど真面目な人物であった。その人物通り、多宝塔碑では重厚感のある強い字形が特徴で性格が作品に現れているような気がした。楷書の手本として古くから使われていたと考えると多くの人がこの古典に触れて道を形成してきたのだと実感した。

「道」というのは様々な読み方で現在も使われている。この小論文を書く前と書いた後では「道」の一文字がどんな意味をしているのか考えが変わった気がする。そして「書道」という言葉もまた、「習字」から変化し今は「書道」という形で私に芸術の素晴らしさを教えてくれた。書道を受け継ぐ人が少なくなった今、新たな書の意味として私は人と人をつなぐ一本の道であると伝えたい。

私はこれからも、様々な古典に触れ、古代の人達の文化を知り、じっくり字と向きあつて書いていきたい。冒頭の「一番素敵な道を教えてくれた」とは、会話や文、人との交流という形ではなく、書として古代から現代、現代から未来へと続く道である。私はこの経験を踏まえて新たな書への挑戦や歴史を探り、未来まで残る「書道」を見つけないと思う。そしてそれをまた誰かの手から手へとバトンを繋いで途切れることのない「道」を形成して欲しい。

(傍線部分は原文のまま)